

第 100 話<松田農場>の要約と参考資料

第 100 話<松田農場>の要約

「鉦山に頼って暮らしていると、鉦山といっしょにつぶれるぞ」と忠告され、佐藤正四さんは熊本県八代の松田農場に行き、松田喜一先生の講習を受けました。そのとき教えられた農民精神が、後年、ヒ素中毒で不自由な体に困難を課して畑で働く姿の中に生きていました。

第 100 話<松田農場>の参考資料

100-1 松田喜一大講演会

延岡新聞 1933 年 2 月 10 日記事

満州の農業で 経営者の立場から もっとも正確な調査に基き 今夜松田喜市氏が講演

目下延中肥後農友会の松田喜市氏は、昨年中熊本県が集団農業経営を満州国において行はんとするに当たり、実地観察として熊本県及びその他各種の公共団体から「経営者として」の実際的立場から委嘱を受け、9 月から 10 月に亘って具さに調査したことは当時報じたところであるが、これまでの学者や他の観察とは其内容を全然異にし、事実即したる調査を遂げたので、同氏の得た知識はわが国農政上はもとより、為政の任にあるものにも必要な事柄が多いので、延岡町農会では特に同氏に交渉して今 6 日夜 6 時から市民一般のために延岡図書館で一大講演会をなすことになった。

100-2 松田農場

佐藤正四さんの話（1981 年 10 月 8 日聴取）

（畑に出ることができん体になって）松田農場のことをちょいちょい思い出す。1 か月鍛えられたのが、まだ体に残っている。私は鉦山やめてすぐ、昭和 12 年 3 月に松田農場に行った。熊本県八代郡昭和村の干拓地であって、大日本農友会松田農場といいよった。30 町歩の農場に生徒が 100 人。四国、中国、九州、朝鮮から来よった。こっちから願書をだすと、学業、成績を見て、むこうが選考してくる。毎年、短期講習として、年に 2、3 回の講習、それと毎年 3 月に、1 か月の長期講習があつた。農場長の松田喜一さんが厳しい人。松田さんは農事試験場で肥料分析をやりよった。そのあと熊本県の黒石原に 80 町歩の土地を買って失敗した、と言いよった。「土を見てかわんと、黒石原には馬鈴薯もできん」と話していた。そこで失敗して干拓地に、農民精神をたたきこむための道場をつくった。質素な生活で、家はワラぶきの家、壁もワラ。食糧は麦と米を混ぜ、自分で作った野菜を入れた雑炊。雑炊だったら、満腹になつても、体をそこなうことがない。100 人

の講習性を 10 班に分けて、3 間に 3 間の部屋に 10 人ずつ入れて生活させられた。夜業に草履つくりをやらされた。

朝 5 時に起床、朝礼。食事当番が食事をこさえる間に、ひと働き。朝食。仕事別の人夫割りがある。1 か月間の農作業は、カンランとか白菜をつくったり、蜜柑山の手入れ。講習生は 40 人 (?) おったから、ほとんど毎日、講習がありよった。田畑は助教が始動した。〈自給自足でやっていけ〉という精神。受講料は 1 か月に 20 円。自分で日役とりに行ったものをためた。受講料への批判も出ていた。受講料をとったうえ、生徒がつくった農作物を換金して儲けよる。

松田農場で学んだ〈理想の農業〉とは、人並みに働けば人並みの作しかできんが、人並みはずれて働けば、人並み以上の作ができる。人並みにしとっちゃダメだ。人を助けようと思っても、自分が川に溺れておっては助けるこたでけん。自分はしっかりと踏んばって、助けなできん。

1 か月松田農場に行って、帰ってきてからはずっと農業です。

川原一之「夢買不動尊」(「土呂久羅漢」所収) P68-71

熊本県の八代郡に、不知火海を干拓してつくった昭和村という村がありました。その村の大日本農友会松田農場で、毎年 3 月に 30 人の生徒を募集しては、1 か月間の講習がありよったってす。鉾山をやめたわたしは、昭和 12 年の 3 月に、そこで講習を受けました。

高千穂から熊本までバスで出て、熊本から鹿児島本線に乗って千丁駅で下車、あとは一里ばかり歩いて昭和村へ行くとです。昭和になって干拓したんで昭和村と呼ばれたそうですが、とにかく広々とした村でした。ちょうど田んぼに麦の植わった時期で、不知火海とのしきりの堤防まで、見わたす限り青々と麦が育っておったですわ。風にゆさゆさ揺れる麦の列を見ながら、こげなところで百姓してみたい。ここで百姓すれば、土呂久ほど骨折らずにすむ、と思うこってした。

山と山にはさまれた谷底の土呂久とは、まるきり地形が違いますね。土呂久の田んぼは、蜜柑畑みたいに斜面を段々に開いた田で、そのまん中にはでえんと、焼き割りのでけざった大岩が腰を据えて残ちよります。それに比べ干拓地の田んぼは、ずうっと平地が広がって、岩がころがるとる心配もありません。田んぼに水を入れるにしても、ひと所を堰くと、何十町歩という田にいつせいに水がたまります。水を抜くときも、ひと所をいじればことがすみます。土呂久では、一枚一枚水のぐあいを見て歩かな駄目ですきね。

農場長は松田喜一という厳しい先生で、農民精神をたたきこむ目的で、不知火海の干拓地に道場をつくったってす。

「人並なら人並み。人並みはずれにや、人並み以上の作はできん」ち、繰り返し教えられました。百姓は人並みに働いておったんでは駄目ちゅうとです。川に溺れとる人を助け

ようと思うても、自分が溺れておったんでは、救うことができません。自分がしっかりと大地に足を踏んばって農業をやっておれば、困っておる農民を救うこともできつとです。「生活は低く、理想は高く」とも教えられました。その信条の通り、松田農場の生活は質素じゃったですな。食事は、麦ごはんには自家製の野菜をまぜた雑炊。雑炊だったら満腹になっても、体をそこなう心配がないという考えです。

農場ではふだん、本科生と専科生合わせて百人が生活しておりました。3月はそれに講習性が加わって、130人にふくれあがるとです。農場には、先生の一家と助手が住む松田記念館と、屋根には藁、壁も藁の建物が9棟ありました。この藁葺きの建物の中には、土間と3間四方の部屋がひとつだけ。その狭い部屋に14、5人の生徒が入れられち、せり合うごつして寝起きしたつてす。

起床は5時。天照大神のお社に参ったあと、食事当番が朝食を準備しよる間に、もう働き始むるとです。1里くらい離れた堤防まで草切りに行き、牛や馬に食わする草を、天秤棒で肩に担いで運んだり。昼間は、カンテラや白菜づくり、蜜柑山の手入れ、牛や馬の養い方といった実習がありました。夜は、土間に並んだ藁打ち石で縄をなうとか、草履づくりの夜業が待ちよります。「人並みはずれたことをせよ」と教えられちよりますき、人より遅くまで働いて、人より早く起きて、また働く。それを、みんな自主的にやっただつてすよ。

憩い日には、不知火の海に行きました。干潮のときは、干潟がはるか遠くまで現れてですな。堤防の向こうの側を、歩いて行けよつたつてすよ。ずうとずうと遠くまで。静かな海に小舟をこぎだして、潮風をいっぱい吸うて、魚釣りを楽しんだこともありました。残念なのは、不知火を見ることのでけざつたことです。なんの火とも知れん火が、提灯とぼしたような火が、夜の海上にいっぱい見ゆるという、あの不知火を。

講習が終わつて戻ちきた土呂久は、相変わらず垂砒焼きの煙につつまれていました。広々とした干拓地と山ん中の鉾毒の部落とでは、まるで条件が違ひますき、土呂久で松田農場のまねはできません。じゃが、たたき込まれた農民精神は、どげな条件のもとでも生かすことができます。苦しければ苦しいしこ、その精神は力を発揮します。わたしはその精神を支えにして、鉾毒に負けんごつ頑張つたつてす。

「鉾山はいつかは去つていく。それまでは、どんげ苦しい目に遭うたつちや、百姓を止むるわけにいかん」と心に決めちかる。

たつた1カ月の講習でしたが、あんときの体験は、今でもわたしの体に残ちよりますと。

100-3 農民の意識

川原一之「土呂久に見る殉農の意識」(「宮崎および他の地域における文化落差に関する総合的研究」) P132-P133

M・S（佐藤正四）さんは1915（大正4）年に土呂久の農家の長男として生まれた。鉱山のまき散らす鉱毒によって換金作物が打撃を受けた結果、M・Sさんは賃金収入を求めて1933（昭和8）年に鉱山へ働きに出た。仕事は、川岸に石垣を築いて鉱滓の堆積場をつくること。この坑外作業を通してM・Sさんの目に見えてきた労働者の世界は――

「鉱山で働くと、人間が怠け者になってしまう。雇われて働く仕事だから、監督が見回りにきたときだけ一生懸命働くふりして、あとは時間さえつぶせばいいという考えで、少しも勤勉さが無い。その怠けぐせがつくと、百姓仕事の方に影響がでてき始めた。最初のうちは、朝早く起きて牛の草刈りをすませてから働きに行った。それが『草刈は帰ってからでいいわ』となり、そのうち鉱山から帰ってくると『よだきい。今日は休も』となって、草刈りに行かなくなってしまった」

M・Sさんは3年余り働いて、鉱山をやめると農業に戻った。これ以上、田畑の荒れるのを放置できなかったためだが、きっかけになったのは、祖父から、

「鉱山は掘りだす金がなくなれば、会社の金もなくなる。百姓を忘れて鉱山一本でやりよると、鉱山がつぶれたとき、百姓家もいっしょにつぶれることになるぞ」と忠告されたことだった。この言葉は「鉱業は一時に農業は永遠なり」の標語と共通して、<農>の永遠性を信ずる農民意識に裏打ちされている。<農>が産業社会に対抗していくには、<農>の永遠性をよりどころにして確たる足場を固めるしかなかったのだと思われる。

M・Sさんは熊本県の農民道場で講習を受けて、「生活は低く、理想は高く」といった小農民自立の精神を学んで帰ると、山奥の耕作地でそれを実践するのであった。

*佐藤正四さんが亡くなったのは、1997（平成9）年6月23日。

100-4 自立の精神

佐藤正四さんの話（1982年10月1日聴取）

外に出て、もう1回農業をやりたい。そんな気持ちになるとですがね。治るちいう医者がおらんもんですから。わたしたちより10歳も年上の者が元気して稼ぎよるのを見ると、はがゆいですね。情けなくてね。足が悪くなってから、しじゅう考えよったらうつ病になった。薬を飲みよるとですよ。こういう病気（多発性神経炎）しとるけ、ほかの病気せんでもええとですよ。去年ヘルペスが出て、熊大に10日ばかり、ここから通うたです。ひとつ病気あるとじゃから、ほかの病気はつかんでもええとに。これもまた自然で、自分が借りてきた病気と、今は考えるけど。最近では心臓発作が起こり始めてから、外には出られんです。心臓発作は何年前じゃったですかねえ、3年くらい前から。

芥川仁さんの話（1981年10月9日聴取）

正四さんが草むしりに行くのを見たことがある。土呂久川べりの畑まで坂道をくだっ

て行き、ほかの家族は平坦な畔を歩いていくのに、正四さんだけ岩のある険しいところを降りていく。帰りには、この岩を登って帰る。岩に杖をついて、足が踏ん張れないものだから、懸垂をするみたいにして、力を入れて登っていく。足は交互にだしている。ただし踏んばれない。降りるときは、杖を岩に2回くらいついて全身を前に進め、そのあとは腰をついてすべるようにして降りる。草むしりの様子も見たが、2本の松葉杖を片手に持って支えにして、しゃがんで、手の届く範囲の草をむしる。手の範囲が終わると、2、3歩前へ移動して、また始める。

佐藤直さんの話（1981年12月16日聴取）

直射日光に当たるのがいいだろう、というので、草ひきに行く。じっとしておれんのは、体がなまってしまうから。動かすつくとる者が、動かんごとになると、なまってしまう。

佐藤正四さんの話（1981年10月8日聴取）

岩をほうて上がるのを家族の者は心配して「危ねえっちゃが」と言うが、やっぱり場の悪いとこ歩かんと、いいとこばかり歩いては足に力が入らん。へるばかりですわ。岩をほうち上がるには、腕にも力があるし、足にも力がある。訓練せんと、いよいよ足が萎えてしまう。鎌もって、中腰で切らなならんから、畑の草切りは場所のいいところだけ。もう1回農業をしたい。体の元気がいいもんなら、10年なり、まだ働くとですけどね。

佐藤ハツネさんの話（1982年5月16日聴取）

正四さんが北海道旅行したときのこと。千歳空港で、空港の人が車いすをもってきてくれたのに、それを断って、「自分の足で歩いて行く」と、松葉杖つきながら、ゆっくり歩いて行った。札幌行きのバスが待っていてくれて、いちばん最後に乗り込んだ。